

# 鹿とつのか

このしま おう こく  
木 島 櫻 谷

## 文展で漱石の酷評よんだ冴え

木島櫻谷の生涯最大のエピソードは、大正元年の第六回文展で「一等なし」の二等賞一席を得た大作「寒月」を、夏目漱石に酷評されたことだろう。

時に埋もれた冬の疎林を、一匹の狐(きつね)がゆく情景を描いた六曲二双屏風は、寒月の放つ青白い光に染めあげられて、一神すこ味のあるリアリズムを生んでいた。櫻谷の研(けん)えた色感を示す代表的な作品である。

新聞から文展評を依頼された漱石は、この絵の削であからさまな不快を表明した。「月はずいぶんとしょんじけしている。竹は夜でしようといっている。とらるが動物は、いへ肩間ですと

善えている」とと弾問答のような評を書き、以後は、屏風(びょうぶ)にするより写真の書写にした方がよい、と断じたのである。

櫻谷にとって、しかしこの話は決して不名誉なことではない。漱石の恣意(しいたい)的な感想は、ものの断定の仕事の一つのサンプルにすぎない。むしろ、それだけ漱石がムキになったのは、好意は別として、何か見過ごすことのできないものが絵にあったからかもしれないのだ。

その「寒月」を描いたころまでが、木島櫻谷の全盛期であった。明治十年、京都に生まれ、今尾景年

のもとで田川・四条派風の手堅い写生を身につけた櫻谷は、明治四十年の第一回文展に二等なしの二等賞でデビューする。以後、一等、二等、三等、二等、そして「寒月」の一等と受賞を続け、初期文展のスターたちのなかでも、飛び抜けた成績をあげた男として名をとどめるところになった。

その裏には、文展審査員だった前、屏風の、無邪気なまでの櫻谷ひいきがあったともいう。弟子の作品には最高賞をつけるが、他の出品作には見向きもしない。弟子のことは自分が一番よく知っているというのが、師匠(しせう)の理屈であった。

「江戸時代から続いてきた田山・四条派の最後の人として、練達した筆技の持ち主だった。毎年の褒賞が、ひいきの引き出しになって、かえって実力を正当に評価されない面があった人」と、美術史家の細野正信氏は言う。

開催中の「帝機」回顧展(二十三日まで・東京銀座、松屋)に出品されているこの「つのとく鹿」は、晩年の作に属する。文展が帝機に代わってからも、こうした感傷性の勝った佳作を時折発表して健在を示したが、昭和八年を最後になぜか彼は展覧会出品をやめ、世間との交わりを断った。

詩書を反としつつどんな想念に遊んでいたのか、今は想像するほかない。 芥川 喜好記者

